

一般演題10-5

第一種装置保有施設における医師の高気圧酸素治療に対する意識調査とその結果について

冠崎大毅¹⁾ 太田雅文¹⁾ 加藤知子¹⁾ 前田将良¹⁾
林 裕一¹⁾ 丹羽康江²⁾

1) 宇治徳洲会病院 臨床工学救急管理室 循環器救急科
2) 宇治徳洲会病院 臨床工学救急管理室 放射線治療科

【背景】

高気圧酸素治療（以下HBO）を取り囲む我が国の現状は、装置保有施設の減少、保険点数の未改善など厳しい点が少なくない。宇治徳洲会病院では救急分野を中心とした総合病院で、2001年に第一種装置を配備してから多くの治療件数（2回の装置更新、総治療回数17805回）を実施してきたが、外傷に関連した救急的疾患（特に整形外科）の依頼が多い傾向があった。しかし医師の異動で実施件数が大きく変動した経緯もあり、個々の医師に依存していた現状が報告された（第48回日本高気圧環境・潜水医学会太田発表）。

【目的】

総合病院としてHBOの認識度について現状を把握するため、当院に勤務する医師を対象HBOに関するアンケート調査を行った。その結果と臨床の治療実績の変化を比較し、傾向を探る。

【方法】

当院に勤務する常勤医師98名、非常勤医師25名に対し、HBOに関するアンケート調査を実施した。またこの調査実施前後での実施状況（症例数、依頼科、疾患など）の変化の有無について評価した。

【結果】

回答が得られたのは計56名。その中でHBOを「知っている」は52/56（93%）、当院に「HBO装置がある」と知るのは50/56（89%）と高かった。依頼歴は31/56（56%）にあり、効果が「ある」としたのは16/31（52%）だった。疾患はCO中毒、腸閉塞、急性脊髄障害、重症感染症や末梢循環障害などが多く、今後は放射線または化学療法との併用、重症の低酸素性脳機能

障害の他、掲載した保険適応の疾患の全般的が挙げられていた。一方で保険点数について救急・非救急があることは46%、非救急的疾患での低い保険点数は34%と低かった。また調査後は適応疾患に変化がみられたが、要素が多く当該調査の影響は不明である。

【まとめ】

HBOに対する医師の認知度は高く、実施・依頼を行ったことがあると半数以上の回答が得られたが、実施・依頼を行ったことがあると回答した医師は、半数以上が今後も継続して実施・依頼すると回答された。それに対し実施・依頼を行わないと回答した医師の理由として、エビデンスがないことや適応基準がわからないため施行に対し不安要素がある。また自由記載には否定的な意見が多く挙げられたが、肯定的な意見もあった。

【考察】

アンケート調査後は一時的に治療回数が増加するも一過性で効果が弱かった。また各診療科に適応した疾患毎に、医師に啓発活動を行うことにより、アンケート調査で挙げられたHBOに対する不安要素を取り除くことができ、治療回数増加につながったと考えられた。

【展望と課題】

今後、医師・看護師と協力して、治療適応や効果判定・評価方法など、当院におけるHBOの診療指針を構築していきたい。また今回、医師に限定して実施したアンケート調査を看護師や救急隊に対しても同様に行い、認知度の評価や啓発を行いたい。